
チョコレートみたいな恋のうた

橙花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チヨコレートみたいな恋のうた

【Nコード】

N5495L

【作者名】

橙花

【あらすじ】

BL小説のほのぼの短編集です。必読をお読みになってからの方が読みやすいと思います。

ちよつとした必読

登場人物属性説明

大地

小悪魔な面も持ち合わせてる天然ちゃん。人といるのが好きで、どんな人にもスキンシップ過多。

幸樹

キングオブへたれ。攻めても攻めきれない。恋人とにかく尽くします。みんなのお母さんのなまめ役。

彰人

兎に角、クールビューティーで大人。言葉が足りないだけで、ほんとは全身全霊で相手のことを愛してます。

隆人

彰人の弟。後輩の立場ゆえに敬語を使用します。大型犬のような性格で、基本大好きな人には従順だけど、たまには噛みついたり。それは主に嫉妬とか独占欲から。

直哉

変態以外の何者でもない子。好きな人とはずっと一緒にいたいんだけど『仕事と私どっちが大切なのよ』的な質問をされるとかなり迷っちゃう仕事バカ。

恵介

腹黒を笑顔の裏に隠した、好きな人程イジメたくなるとえすな子。
飴と鞭は得意分野。恋人をイジメていいのは自分だけ。

この6人で私の小説は構成されています。

といいますか、私が書きたい属性に名前をつけたただけなので、この中から無節操に組み合わせます。

例えば、今日は直哉×大地で、次は隆人×大地という風になります。もちろん大地の浮気というわけではありません。

短編は一話一話が独立してます。

こういった形が苦手な方は読まないことをお勧めいたします。ちなみに、6人は友達で沖縄在住という設定です。

ここまでお読みくださりありがとうございました。

ナツゴコロ（前書き）

直哉×大地

ナツゴコロ

夏、ではないんだけど、ジリジリと夏に向かって一步一步近づくようなこの季節。海ではしゃぐ観光客も増えてきた。そんな中で大地が買ってきてくれたアイスは結構嬉しかった。

え。たかってるわけじゃないですよ。大地の好意です。好意。

「なおよー、これでいい？」

袋から出てきたのはカップに入ったチョコチップのやつ。大地が選んでくれたただで幸せなんだけど、やっぱりヒンヤリとした感覚は気持ちいい。思わず笑みを浮かべた俺につられるようにして大地もふにやりと笑う。幸せ倍增！とか一人で考えていると、大地のアイスが袋から取り出された。それは、練乳いちごとデカデカと書かれた、棒状のアイス。

「だ、だいち……」

「なに？」

「いえ、なんでも……」

わけわかんないさーと小首を傾げ、パクリとアイスにかじりつく大地。が、想像以上に冷たかったらしくすぐ口を離してしまった。つめひゃい、とかなんとか言いながら少し間をおいて、赤くて小さな舌でペロペロとアイスを舐めた。ちよつと、もう この子つたら、誘ってるようにしか見えないんですが……！

「なお？なんかしたさ？」

「へ？ あ、ナンデモナイデス…」

大地のかわいい姿に見とれていると、いぶかしげな視線を投げられた。慌てて自分のアイスに目を移して、一口パクリ。少し溶けるなどか、おいしいなどか思ったのは、ほんの一瞬。

ちらり。また大地に顔を戻す。暖かな気温でとろりと溶けて垂れた白い液体が大地の舌で掬われる。ちゅっ、なんてリップ音がまた余計な想像を掻き立てるんだ。ちっこい口で一生懸命ぺろぺろ。

脳内で自動変換されてるのは言うまでもありません。何について？ いやん、聞かないでくださいよ。

「なお」

「えっ!？」

「まだなんも言っていないさあ」

変なのってケタケタ笑う大地がかわいすぎるって、マジで。あ、アイス一口しか食べてないのに半分溶けてる…

「それ、一口ちょーだい」

そう言うなり伸びてきた手にあっさりとスプーンを奪われる。半個体半液体になったアイスが大地の口に運ばれる。すんなり果たされた間接キス。不意打ちにドキドキが止まらない。

「今度はなおの番ね」

あーんと差し出されたのは、さっきまで俺がうらやましいと思ってたソレ。ここは大地の言葉に従うことにして、んあっと口を開ける。すると、ニヤリと大地が笑った。

「くらえ!!」

「んッ!? む、う!」

物騒な言葉が聞こえたと思った次の瞬間、アイスが喉の奥に突っ込まれた。いきなりのことで、思わず呼吸が停止する。アイスが引き抜かれてからは、ゲホゴホと咳が止まらない。涙目になりながら大地を見ると、べえっと舌を出された。

「ヤラシイ目で見てたおしおきさあ!」

かぷり。先端をかじった大地は、楽しそうにんふふと笑った。
もう、完敗です。

おわり

b a t h t i m e (前書き)

直哉
× 大地

b a t h t i m e

ちやぶん。お湯が揺れて立てる音が壁に反響する。それ以外にあるのは少し遠慮したかのような息づかい。

多かれ少なかれ、後悔はしていた。気まずい空気が俺を責める。くるり、くるりと髪を指に巻いて現実逃避。

……いや、駄目だって。この雰囲気はどうにかして打破しなきゃ。ばちんと、脳内で両頬を打った。

なんとなく新鮮さを求めて風呂に押し入ったまではよかった。完璧だったと言ってもいい。

しかし、失敗したと気がついたのはその直後。浴室に入っただけい、その後のプランがなかった。沈黙と狭い浴槽の中、ふたりで膝を折る光景は流石に計画を練っている段階では浮かんでこなかった。

次にお湯が波立ったら、声を掛けよう。なんて、そんな考えが脳裏をよぎったその時。

「…だいちい」

「ん？」

「たっちゃった」

静けさを打ち破ったのは直哉のアホっぽい声。ともすれば『えへ

『なんてのが語尾につきそうな感じで。

じとりと非難の視線を向けると、大地だつてそのつもりでしょ？
つて。いたずらっ子みたいな眼差しを俺に向けて、するりと伸びて
くる腕。

拒む理由なんて、どこにもない。

おわり

Q a n d A (前書き)

隆人 ↓ 大地

Q and A

「女ってめんどくさいっすよね」

ギリリと先ほど思いっきり叩かれた頬が痛んだ。もしかしたら、見事なもみじ型になっているかもしれない。

叩かれた後にやってらんないなあと思いつつ、ふらりと立ち寄った公園。そんな中、大地先輩が公園に来たのは全くの偶然だった。見知った顔に安心して、なんとなく本音がぼろり。

「え。なんかしたの隆人ったら」

「一言で修羅場っすよ」

「あらら。なんて言ったの？」

ふわり。俺の心を揺り動かして止まない匂いがすぐそこにある。俺の頬をのぞき込むようにして近づいた顔は、手を伸ばせば簡単にとらえられそうだった。

「…まあ よくあるタイプの言葉ですよ」

「より、戻さないの？」

「もう修復不能ですね」

まあ、修復する気なんてさらさらないけど。ただ、友達の紹介で始まっただけの関係だし。

座っていたベンチからバスケットボールを持って立ち上がる。それで、いろんなものから逃れるようにコートへと駆けだした。大地先輩は若いなあなんて笑いながら、俺がシュートしそこねたボールを拾うために俺の横を通り過ぎていく。

『ねえ！私とあの先輩のどっちが大切なのよ！！』

もちろんそんなの、大地先輩に決まってる。
って答えたって言ったら、大地先輩どうしますか？

おわり

心に刻みましょう。(前書き)

直哉×大地

心に刻みましょう。

史上最低最悪。頭が痛い、どころじゃなかった。体がバラバラになつて溶けて、全く自分の思い通りにならない。
気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い。

「あ、起きた」

のんびり話しかけたのは多分直哉。ベッドに突つ伏してて、下半身しか見えないから、声と記憶を頼りに判断するしかなかった。顔上げる気力もないし、っていうか気持ち悪い。

「昨日って結局何杯飲んだの？」

「知らない……」

気がついたらバカみたいに飲まされて、何杯飲んだかなんて覚えてない。そもそも、その場で自分がどんな行動をとったのかさえ分からないんだからどうしようもない。

記憶があるのは、外で散々吐いたあたりから。気持ち悪くて外でうえーってしてたら、直哉に見つかってそのまま家まで送られて。

で、一番最悪なのがその後。あろうことか、この馬鹿はベッドに俺を押し倒したんだ。空っぽの胃からせり上がってくる感覚が酷くて、胃が口から出そうだと本気で思っくらい気持ち悪かった。直哉の優しさも皆無に等しかったし、ほんと酷い抱かれ方をしたもんだ。

そういうわけで、色んな状況が重なり重なって今のコンディションは最低最悪だった。

「吐きそう?」

「それはないけど…」

ふわふわと頭を撫でられる。優しさが含まれてる分、昨日の行為より気持ちいい。

「気持ち悪い?」

「…うん」

「めちゃくちゃ飲んでたもんね」

「あんなことしたから余計しんどい」

非難の思いも込めて言い放つ。しかし、効果はないらしく、頭を撫でながらベッドに腰を下ろされた。まだ、顔は見えない。

「教訓、ね?」

「え?」

「酔っ払った大地、他の人に見せたくないし、ひどいことしたらもう忘れないでしょ？」

やられた。そう直感的に思った。直哉の確信犯みたいな顔とか、言葉とか。

ずるい。俺がそういうの弱いって知ってるくせに。

「…お前なんか嫌い」

「うん、知ってる」

赤くなっていく頬が隠せればいいのに。

おわり

カミサマにお願い（前書き）

幸樹×大地

カミサマにお願い

「…梅雨終わってたって言ったじゃん」

「いや、梅雨が終わったからって雨が消滅するわけじゃないですよ、大地さん」

「…幸樹のバカ」

なんて理不尽な！

俺に八つ当たりしたお姫さまは、ぷいっと外の方を向いてしまった。キツと外を睨みつけるような視線は結構な恐ろしさ。

昨日から海に行きたいって言ってたからなあ……

天気予報が外れて雨が降ってるってのが、余計にたちが悪い。

「そんな拗ねなくてもいいじゃん」

真っ昼間から電気をつけて、そんなに面白いわけでもないバラエティー番組を鑑賞。二人掛けソファに並んで座ってるのは非常によろしいんだけど、肝心の大地の機嫌が斜めだから全部台無しだ。今だってこっち向いてくれないし。

「だってさあ……」

やっと、まともな会話ができたと思ったその時。

「お！」

「…ッ！」

一瞬部屋が白くなった。見ていたテレビの映像が乱れる。すぐに落ちたらしい。光ってから音がするまで早かったし。

「すっげー近かった…って、大地？」

雷って、なんかテンション高くなるよねあ……

稲妻を見ちゃった日にはもうテンションがバカみたいに上がってさ。かつこいいじゃん、あれ。

って話をしたかったんです、大地と。でも、肝心の大地はそれどころじゃないみたい。例えるなら、なんかに怯えてる子犬、みたいな。

あ。もしかして。

「大地、おいでー」

ふわり、手を広げて「俺が抱きしめてやるぜ」ポーズ。もちろん、冗談のつもりで。

「おいでってばー」

「や!」

「えー 怖いんでしょう?」

「だからって、幸樹に抱きつく必要はないさあ!」

大地はちよっぴりツンデレが入ってると思うんですよ、僕。なんか、大地は俺を振り回して楽しんでるっていうか。……俺が、大地になら振り回されても構わないって思ってるっていうか。

って、妄想を繰り広げてたんだけど、実際の大地の行動はそんなもんじゃなかった。事实は小説よりも奇なり。

「あ、あの…大地、さん?」

大地は俺の腕の中に飛び込んできました。温度が、肌が、匂いがすぐそこ。思考回路が沸騰してる。

突然のことに結局俺の両腕は大地を抱きしめることをしなくて、ただ宙を漂う。わー 情けねえ……

「ぎゅーってしてよ、ばかあ！」

……大地さんのお叱りが飛んできました。

ちっちゃく謝ってから片腕を背中に、もう片方で頭をなでなで。少しでも大地が安心できるように。

「雷、怖いのか？」

俺の問いかけにコクコクと頷く大地。

いったい、このピカツとしてゴロツてなるだけの何が怖いんだろ
うか。寧ろかつこいと思うんだけどなあ。

まあ かわいいから許します。

「……だーいち」

「なに……？」

「キス、しよつか」

ちよつと、大胆な行動に出てみる。普段ならこういうことは言えないけど、なんとなく今なら言えるような気がして。

怒鳴られるなら、それはそれでいい。

……いや、マゾとか、そういうのじゃなくて。

怒鳴るってことはそれなりに元気があるってことだし、ギャーギャー騒ぎあってる間に雷が終わればいいなっていう算段なわけです。

よ。まあ さつきがさつきだったから、そうなる可能性は皆無に等しいんだけど。

予想通り、コクンと頷いた大地。もう一個の作戦はこうだ。キスで気を紛らわせてしまおう作戦。安直とか言うな！

いや、でも、うん。そこまでのテクニックがあるかと言われれば、激しく微妙なところですけどね……

あいにく、そんなに経験があるわけでもないので、ってネガティブは置いといて。

いざ、作戦実行！

「ん……ッ」

鼻にかかったような大地の声。そんな小さなことにすら欲求を煽られて大変。

ちっちゃくて、ふにふにの唇。見てるだけでも気持ちよさそうってわかるような、キスがしたくなるような、そんな唇。

自分の唇でその感覚を楽しみながら、大地の舌を絡め取る。ちょっと震えて逃げるような感覚がたまらない。

いつの間にか轟音と呼べるまでに成長していた雨の音が遠くなくていく。俺が夢中になってどうするんだって話。でも、それくらい大地とのキスは気持ちよかった。

「…もう、大丈夫？」

どれくらいの間そうしていたんだろう。苦しくなったら息継ぎをして、また求め合って、息継ぎをして、の繰り返し。
外に意識を向けると、もう雨はあがりそうだった。これなら問題ない、と思って、大地を拘束していた腕を放す。

ふいつとうつむいた目の縁が綺麗に染まっている。唇を少しとんがらせて、かわいい。

「…幸樹に知られなくなかったさ」

「なんで？」

「…いい年した大人が雷が怖いなんてさ、バカみたいじゃん」

ぼつりぼつり、吐き出すように言葉を紡ぐ大地。最後には、呆れたでしょ？なんてオマケ付き。

とんでもない！ 超超超かわいくてどうしよう！とか思ってたくらいなのに。

「克服しようとか思わないでよ？」

「え？」

「俺がいつでも抱きしめてあげる」

さつき大地にしたように、また両腕を広げる。と、今度は、バカ

じゃないの！って言われました。大地は耳の縁まで真っ赤っか。
うん。そうそう、やっぱり元気な大地が一番。

「…ねえ、幸樹」

「うん？」

「…ありがとう」

こんな気分なら、また、味わいたい。
なんて。

なんなら、毎日雷でも大歓迎だ。

でも、こんなかわいい大地は他人に見せたくないから。ふたりきりのとき、たまに、お願いします。

おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5495/>

チョコレートみたいな恋のうた

2011年10月7日04時58分発行